

第六章 外国貿易（一）

外国貿易の拡大は国内の価値の総量を直ちに増やすわけではないが、手に入る財の量を増やし、その結果として享受の総和を増やす。外国産品の価値は、それと交換するために差し出す国内の土地と労働の産出物の量によって測られるため、新しい市場の開拓によって同じだけの国内産品と引き換えに二倍の数量の外国産品を得られるようになる。でも、価値の総量は増えない。英国産品を一、〇〇〇ポンド相当購入し、それと引き換えに得た外国産品を英国市場で一、二〇〇ポンドで売れるなら、このように資本を用いた場合、商人は資本に対して二〇パーセントの利潤を得る。ただし、得られる外国産品の数量が多くても少なくても、彼の利潤も輸入品の価値も増減しない。例えば、輸入量が二五樽でも五〇樽でも、いずれも一、二〇〇ポンドで売れるなら、利潤は二〇〇ポンドにとどまり、国内にもたらされる価値も変わらない。もし五〇樽が一、二〇〇ポンドを超える価格で売れるなら、この商人の利潤率は一般水準を上回り、資本がこの取引に

流入してワイン価格は下落し、やがて利潤率は元の水準に収束する。

一部の商人が対外取引で時に大きな利益を得ると、国内の平均利潤率が高まるという見方がある。さらに、収益性の高い新たな対外貿易に資本を向けるべく他の部門から資本が引き抜かれると、物価が一般に上昇し、その結果として利潤が一般に増えるともいう。権威ある見解によれば、需要は変わらないまま、穀物の栽培や織物・帽子・靴の製造に回る資本が必然的に減り、これらの価格が上がるため、対外取引に関わる商人だけでなく、農家や織物・帽子・靴の業者の利潤も増えるとされる。

この立場の人びとは、職業や業種ごとの利潤は互いに平準化に向かい、その上げ下げも同時に起こりやすい点では筆者と一致している。違いは、彼らが利潤の平等を利潤全体の上昇によって実現されると主張するのに対し、筆者は優遇された部門の利潤は速やかに低下して全体の平均的な水準に並ぶと考える点にある。

まず、需要が落ちない限り穀物や布、帽子や靴の生産に向かう資本は減らず、その場合、それらの価格は上がらない。外国産品の購入に用いられるイングランドの土地と労働の産出物の割合は、同程度にも、より多くにも、より少なくにもなり得る。同程度なら、布、靴、穀物、帽子への需要も、それらの生産に向かう資本の配分も変わらない。

3 第六章 外国貿易（一）

外国産品が安くなり、これに用いられる割合が小さくなれば、他の購入に回す余力が生まれ、その結果、外国産品の消費者の可処分収入が増えるため、帽子や靴、穀物などへの需要が以前より強まることもあり得る。このとき、以前はより高い価値の外国産品の購入に充てられていた資本も可処分となるので、需要が増えても供給を増やす手段が同時に存在し、したがって価格も利潤も持続的には上がらない。逆に、より多い割合が必要なら他の品への支出は細り、帽子や靴などの需要は減り、これらの生産から解放される資本は外国産品の代金を賄う輸出品の製造により多く振り向けられる。結局、外国産品と国内産品を合わせた、価値でみた総需要は国の収入と資本に制約され、一方が増えれば他方は減る。たとえば、同量のイングランド産品との交換で輸入できるワインの量が二倍になれば、人々はワインを二倍飲むか、ワインは同量のままイングランド産品の消費を増やすかのいずれかである。年収が一、〇〇〇ポンドの人が、毎年一〇〇ポンドでワイン一樽（パイプ）を買い、九〇〇ポンドでイングランド産品を買っていたとして、ワインが一樽五〇ポンドに下がれば、浮いた五〇ポンドでワインをもう一樽買うか、イングランド産品の購入を増やせる。前者なら対外貿易は少しも乱れず、輸出するイングランド産品の量は同じで、受け取るワインの量だけが二倍になるが、その価値は二倍に

はならない。後者なら輸出するイングランド産品は減り、消費者は従来輸出に回していた品や好みの別の品を国内で消費するようになり、その生産に必要な資本は対外貿易から解放された資本で賄われる。

資本の蓄積には二つの方法がある。収入が増えた分を貯蓄する場合と、消費を抑えて貯蓄を捻出する場合である。支出を据え置いたまま私の利潤が一、〇〇〇ポンドから一、二〇〇ポンドに増えれば、私は年々以前より二〇〇ポンド多く蓄積する。利潤が変わらなくても私が支出から二〇〇ポンドを節約すれば結果は同じで、年々二〇〇ポンドが私の資本に加わる。利潤率が二〇パーセントから四〇パーセントに上がる場合、ワイン輸入商は、従来一、〇〇〇ポンドで買っていた英国製品を八五七ポンド二シリング一〇ペンスで仕入れ、その引き換えに輸入するワインを一、二〇〇ポンドで売り続けなければならない。あるいは、英国製品の仕入れを一、〇〇〇ポンドのままとするなら、ワインの売値を一、四〇〇ポンドに引き上げなければならない。いずれでも彼の利潤率は四〇パーセントになる。他方で、彼の支出対象である財が幅広く値下がりし、彼自身を含む消費者全員が従来の一、〇〇〇ポンドの支出につき二〇〇ポンドを節約できるなら、彼らはより効果的に国の実質的な富を増やすことになる。前者は収入増による貯蓄、後者

は支出減による貯蓄である。

機械を導入して、所得の支出対象となっている消費財の大部分の価格が二〇パーセント下がれば、所得が二〇パーセント増えたのと同程度に節約できる。ただし、前者では利潤率は横ばいのままであり、後者では利潤率が二〇パーセント上がる。同様に、安価な外国製品の導入によって支出を二〇パーセント削減できるなら、その効果は機械導入による生産費低下とまったく同じだが、利潤率は上がらない。

したがって、市場が拡大しても、それによって利益率が上がるわけではない。ただし、その拡大は財の総量を押し上げ、結果として労働者の維持に充てられる資金や、労働の対象となる材料を増やすことを可能にする。人々の幸福のためには、利益率の上昇によって享受が増すのと同じくらい、労働のよりよい配分、すなわち各国が自国の立地や気候などの自然的または人為的な利点に適した財を生産し、それを他国の財と交換することによって享受が増すことが重要である。

本書全体を通じて、利潤率は賃金下がったときにのみ上昇し、賃金の持続的な低下は労働者が賃金で購入する必需品の値下がりがあつてはじめて生じると論じられている。したがって、外国貿易の拡大や機械の改良によって労働者の食料や必需品がより安く出

回れば、利潤率は上昇する。自国内で穀物を生産し衣類などの必需品を製造する代わりに、これらをより安く調達できる新たな市場を見いだせば、賃金は下がり、利潤率は上昇する。他方、値下がりの対象が富裕層が消費する財に限られるなら、利潤率は動かない。たとえワイン、ビロード、絹といった高価な品が五割下落しても賃金は変わらず、その結果、利潤率も変わらない。

外国貿易は、所得の使い道の選択肢を広げ、財の豊富さと低価格によって貯蓄と資本蓄積を促す点で、国に大きな恩恵をもたらす。ただし、輸入品が労働者の賃金が支出される種類のものでない限り、資本の利潤を押し上げる傾向はない。

外国貿易についての先の指摘は、国内貿易にも同様に当てはまる。利益率は、より良い労働配分や機械の発明・導入、道路や運河の整備、製造や輸送の省力化といった手段では決して上がらない。これらの要因は価格に作用し、同じ労働またはその産出物の価値で、改良の施された財を交換によってより多く得られるため、消費者には大きな恩恵となるが、利益率には全く影響しない。他方、賃金の引き下げは利益率を押し上げるが、商品の価格には影響しない。改良は社会のあらゆる階層に有利で、誰もが消費者だからである。賃下げは生産者だけに利益をもたらし、彼らの利益は増えても物価は従来の水

準にとどまる。改良の場合、生産者の利益は変わらないが、その利益で購入するあらゆる物の交換価値は低下する。

一国の市場で通用する商品の相対価格を決める原理は、二か国以上の間で交換される商品の相対価格を決めるものではない。

完全に自由な通商のもとでは、各国は自国に最も有利で最大の利益をもたらず分野、つまり最も生産的な事業へ資本と労働を自然に振り向ける。個々人の利益追求は公益と両立し、産業の活性化を後押しし、創意や才能に正当な報酬を与え、自然から授けられた特有の力を最も効果的に生かすことで、労働は最も効率的かつ経済的に配分される。

さらに、生産が拡大して生産総量が増え、その利益が広く行き渡り、文明世界の諸国家から成る国際社会は、利害の共有と交流という共通のきずなで結び付く。そしてこの原理は、ワインはフランスやポルトガルで、穀物はアメリカやポーランドで、金物その他の財はイングランドで生産されることを決定づける。

同一国内では利潤はおおむね同水準に収束し、差が出ても投資先の安全性や条件の良し悪しに応じた小幅にとどまるが、国が異なればそうはならない。ヨークシャーの資本の利潤がロンドンのそれを上回れば、資本は速やかにロンドンからヨークシャーへ移り、

やがて利潤は均される。一方、資本と人口が増え、イングランドの土地の生産性が下がって賃金上がり、その結果として利潤が低下しても、より高い利潤が見込めるオランダやスペイン、ロシアへ資本や人口が必ず移動するとは限らない。

ポルトガルが他国と貿易関係を結ばなければ、国内の資本と労働の多くをワイン生産に振り向け、そのワインと引き換えに自国で使う布地や金物を他国から調達している現在のやり方は維持できない。代わりにそれらを国内で製造するためにその資本の一部を回さざるを得ず、その結果、手に入るそれらはおそらく品質も数量も劣る。

ポルトガルがイングランド産の布と交換するワインの量は、両財がともにイングランド、またはともにポルトガルで生産される場合にそうなるように、各財の生産に投入されたそれぞれの労働量によって決まるのではない。

イングランドは、条件次第では布の生産には一年間で一〇〇人分の労働が必要となり、同じ期間でワインを国内で生産しようとするると一二〇人分の労働を要することがある。その場合、イングランドにとっては、ワインを輸入し、布を輸出してその購入代金を賄うのが、利益にかなう選択である。

ポルトガルでは、ワインの生産は一年に八〇人分の労働で足りるが、布の生産には九

○人分の労働が必要になる。したがって、ポルトガルにとっては、布と引き換えにワインを輸出するのが有利である。この交換は、たとえポルトガルが輸入する財をイギリスより少ない労働で自国生産できる場合でも成り立つ。たとえポルトガルで布を九〇人の労働で作れるとしても、ぶどう栽培から布製造へ資本を移すより、ワイン生産に資本を投じてその収益で布の生産に一〇〇人の労働を要するイギリスから布を輸入した方が、最終的に手に入る布の量は増え、利益も大きく、国益にかなう。

この結果、イングランドは一〇〇人分の労働で生まれた産物を、八〇人分の労働で生まれた産物と交換することになる。しかし、この種の取引は同一国内の個人同士では成立しない。一〇〇人分のイングランド人の労働そのものを八〇人分のイングランド人の労働と取り替えることはできないが、一〇〇人分のイングランド人の労働による産物なら、八〇人分のポルトガル人の労働、六〇人分のロシア人の労働、あるいは一二〇人分の東インド人の労働による産物と交換できる。この点に関する、単一の国と複数の国との違いは、資本がより有利な用途を求めて国から国へは動きにくい一方、国内では州や地域の間を常に機敏に移動することを考えれば、容易に説明がつく。

この条件のもとでは、イングランドの資本家にとっても両国の消費者にとっても、ワ

インと布をいずれもポルトガルで生産するのが最も有利である。したがって、布の生産に投じられているイングランドの資本と労働は、布の生産をポルトガルで行うために移すのが合理的である。この場合、両財の相対価値、すなわち相対価格は、一方がヨークシャー産で他方がロンドン産である場合と同じ原理で決まる。そして、他のあらゆる場合にも、資本が最も高い収益を見込める国に自由に移動できるなら、利潤率の差は解消し、財の実質価格、すなわち労働価格の差は、販売される各市場へ運ぶのに要する追加的な労働量に限られる。

経験上、資本が所有者の直接の統制から離れると、安全性に関する現実の不安や思い込みによる不安が生じ、それが生まれ育った国や築いてきたつながりへの愛着、さらには慣れた暮らしを離れて見知らぬ政府や新たな法に身を委ねることへの躊躇と相まって、海外への資本移転を抑制することが示されている。こうした感情は弱まってほしくないと思いが、このため多くの資産家は、外国でのより高い利潤率を求めるよりも自国の低い利潤率に満足しがちである。

金銀が一般的な流通手段、つまり共通の交換媒介として採用されると、商業上の競争によって、世界の諸国の間に、そのような金属が存在せず取引が物々交換のみであった

と仮定した場合に自然に定まる交易量や取引関係に見合う比率で金銀が配分され、行き渡る。

したがって、布は生産国での費用を上回る価格でポルトガルに売れる場合にのみ輸入され、ワインもポルトガルでの費用を上回る価格でイギリスに売れる場合にのみ輸入される。もし取引が純粋な物々交換なら、イギリスでは同じ労働でぶどうを育てるより布をつくって交換した方がより多くのワインを得られ、かつポルトガルではその逆が成り立つ限り、交換は続く。イギリスがワインの新しい生産工程を見つけ、輸入より自国生産が有利になれば、海外に向けていた資本の一部を国内に振り向け、輸出处の布の製造をやめ、国内需要、すなわち自給のためにワイン生産へ転じる。これに応じてこれらの商品の貨幣価格が調整され、イギリスではワインが下落し、布はこれまでの水準にとどまり、ポルトガルでは両商品の価格は変わらない。当面は、ポルトガルにおける布の価格がイギリスより高い状態が続くため、イギリスからの布の輸出は続くが、対価はワインではなく貨幣で支払われ、やがて国内での貨幣の蓄積と海外での減少が二国における布の相対価格に作用し、輸出は採算に合わなくなる。改良の規模が極めて大きければ、二国の分業は入れ替わり、イギリスが両国で消費されるワインをすべて生産し、ポルト

ガルが両国で消費される布をすべて供給する体制の方が有利になる可能性がある。ただし、これは、貴金属の再配分によってイギリスの布の価格が上昇し、ポルトガルの布の価格が低下する場合に限って実現する。イギリスでは生産の実質的な改善によってワインの相対価格、すなわち自然価格が下がり、貨幣の蓄積によって同国で布の相対価格が上がる。

仮に、イングランドでのワイン製造が改良される前は、イングランドではワイン一杯当たり価格が五〇ポンド、一定量の布の価格が四五ポンド、ポルトガルでは同量のワインの価格が四五ポンド、同量の布の価格が五〇ポンドであったとしよう。したがって、ワインはポルトガルから、布はイングランドから輸出され、利益はそれぞれ同額で五ポンドとなる。

改良の結果、イングランドでのワインの価格は四十五ポンドまで下がり、布の価格は据え置きのままである。商取引は一件ごとに独立している。商人はイングランドで布を四十五ポンドで仕入れ、ポルトガルで通常の利潤を確保できる限り輸出を続ける。彼の業務は単にイングランド産の布を購入し、その代金をポルトガルの貨幣で購入した為替手形で支払うことにすぎない。この貨幣がどうなろうと彼には関係がなく、手形を送れ

ば債務は履行されたとみなす。彼の取引は確かに手形をどの条件で入手できるかに左右されるが、その条件は取引時点で把握しており、手形相場や為替相場に影響しうる要因が何であれ、彼の考慮すべきことではない。

ポルトガルからイングランドへワインが輸出され、市況が良ければ、ワイン輸出者は為替手形を振り出して売り、その買い手は布の輸入者、またはその輸入者に手形を売った者となる。この仕組みにより現金を国境越しに移す必要はなくなり、各国の輸出者は自国で代金を受け取れる。互いに直接やり取りをしなくても、ポルトガルでは布の輸入者が支払った資金がポルトガルのワイン輸出者に渡り、イングランドでは同じ手形の取引を通じて、イングランドの布の輸出者がワイン輸入者に対する代金請求権を得る。

ワインの価格が英国向けの輸出を見込めない水準にある場合でも、毛織物の輸入業者はそれでも為替手形を買い付ける。しかし、その手形の価格はより高くなる。市場に二国間の取引を相殺して最終清算できる逆方向の手形が出回っておらず、その事情を売り手も承知しているからである。売り手は、手形の代金として受け取る金銀を現物で英国の取引先へ送らなければ自分が承認した支払請求に応じられないと知っており、そこで、発生する一切の費用に通常の利潤を加え、それを手形の価格に織り込む。

イギリス向けの為替手形に付くプレミアムが布の輸入で得られる利ざやと等しくなれば輸入は止まる。だがそのプレミアムが二パーセントにとどまり、イギリスの一〇〇ポンドの負債を決済するのにポルトガルでは一〇二ポンドの支払いが要としても、なお原価四五ポンドの布が五〇ポンドで売れる限り、布の輸入は続き、手形は買われ、貨幣はイギリスへ流出する。こうした流れは、ポルトガルでは貨幣が減少し、イギリスでは貨幣が蓄積し、物価が変動してこれらの取引の採算が合わなくなる水準に達するまで続く。

一国で貨幣が減り、他国で増えると、影響は特定の品目にとどまらず、価格全般に及ぶ。その結果、イングランドではワインも布も値上がりし、ポルトガルではいずれも値下がりする。布の価格は当初、イングランドで四五ポンド、ポルトガルで五〇ポンドだったが、やがてポルトガルでは四九または四八ポンドに下がり、イングランドでは四六または四七ポンドに上がると見込まれる。こうした水準では、為替手形のプレミアムを支払った後では十分な利益が得られず、商人はその布を輸入しようとはしない。

各国の通貨は、採算の合う交易を調整するのに必要な量だけ、その国に配分される。イングランドは布地を輸出してワインを輸入した方が、国内の産業の生産性が高まり、

自給の場合より布地とワインの双方を多く確保できる。他方、ポルトガルは布地を輸入し、ワインを輸出した。というのも、ポルトガルの産業をワインの生産に振り向けることが両国にとってより有益だったからである。ところが、イングランドで布地の生産がより難しくなったり、ポルトガルでワインの生産がより難しくなったり、逆にイングランドでワイン、またはポルトガルで布地の生産がより容易になったりすれば、この取引は直ちに成り立たなくなる。

ポルトガルの事情は何ら変わらないが、英国が労働をワイン製造に用いるほうがより生産的だと分かれば、両国間の交易の構図はただちに一変する。ポルトガルのワイン輸出が止まるだけでなく、貴金属の再配分が起こり、ポルトガルによる布の輸入も止まる。両国は、自国でワインと布を生産して自給するのが自国の利益にかなうと判断するだろう。しかし、次のような特異な結果が生じる。イングランドでは、ワインは値下がりする一方で布は値上がりし、消費者は布により多く支払うことになる。これに対し、ポルトガルでは消費者は布とワインの両方をより安く購入できる。さらに、改良が行われた国では物価が上昇し、何の変化もないまま収益性の高い対外貿易の一部門を失った国では物価が低下する。

しかし、ポルトガルにとっての利点は見かけ上のものにすぎない。ポルトガルでは布とワインの総生産が減り、英国では両品目の生産が増える。貨幣価値は両国である程度変動し、英国では下落し、ポルトガルでは上昇する。貨幣で評価すれば、ポルトガルの国民所得は縮小し、同じ基準で見れば英国の国民所得は拡大する。

どの国でも製造業が高度化すれば世界各国間の金銀の配分が変化し、同時に商品の総量が増え、その高度化が起こる国では一般の物価水準が上昇しやすくなることが明らかになった。